

所謂円錐形土偶に就て

小 野 正 文

1. はじめに

2. 資料の紹介

3. 勝坂式土偶の多様性

4. ま と め

1. は じ め に

当博物館では毎年夏、開放講座として「土器作り」を実施している。1984年のこの講座に参加された甲府市の今村伸太郎君は、敷島町松島団地付近で、ある土製品を採集されており、博物館に持参された。これを観察した筆者は、これが縄文中期の所謂円錐形土偶であることと、重要な遺物である趣旨を同君に伝えた。そこで今村君と御家族は、この土偶を当博物館に寄贈してもよいとの申し出があり、現在当博物館の特別収蔵庫にて保管している。

ここに今村伸太郎君と御家族の御厚意に深謝し、合せてこの円錐形土偶の持つ意味について、類例と共に若干の考察をしてみたいと思う。

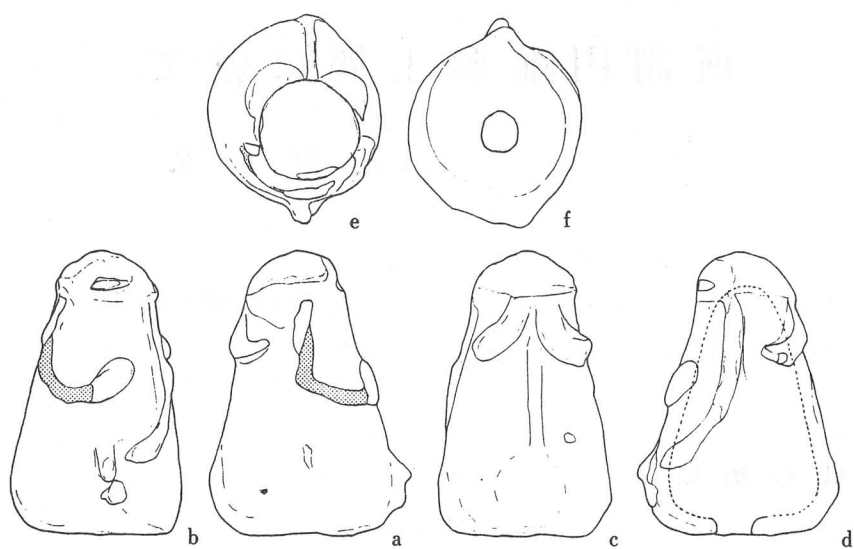
2. 資 料 の 紹 介

第1図1. 敷島町松島団地出土土偶

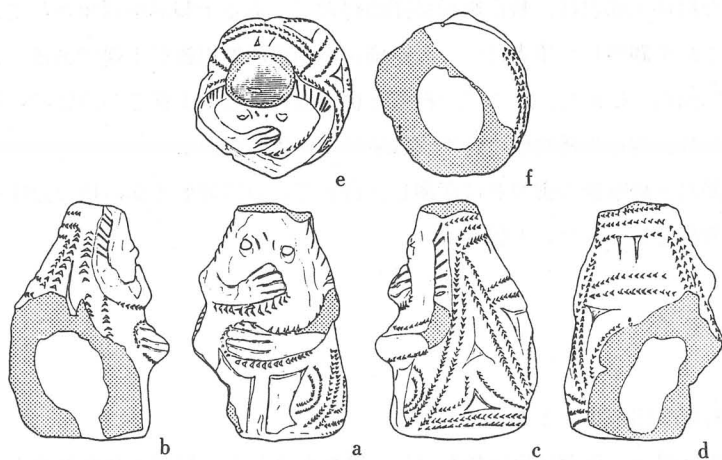
円錐形をした中空土偶で、色調は黒灰色を呈し、磨耗が著しく、長期にわたり水中などでローリングを受けたのではないと思われる。ほぼ完形品であるが、頭部の形状から、さらに大きくなるか否か判断に迷う所がある。円錐形の胴部はほとんど中空となっており、底に16mmほどの穴があいている。右手を胸部に、左手を腹部に置いている。そしてその左手の下に二つの隆起がある。背面は肩部にハの字状の隆帯が見られ、これは黒駒の土偶の肩部と類似しているので、同時期の所産と思われる。そしてハの字状隆帯の中央部から垂下する半隆起帯が見られ、その下部もわずかながら隆起している。全体を隆帯で表現し、時期的な特徴である施文具は使っていない。この土偶は輪積法で製作されたと思われ、粘土の厚さは約6mm程度と薄い。

第1図2. 勝沼町宮の上遺跡出土土偶

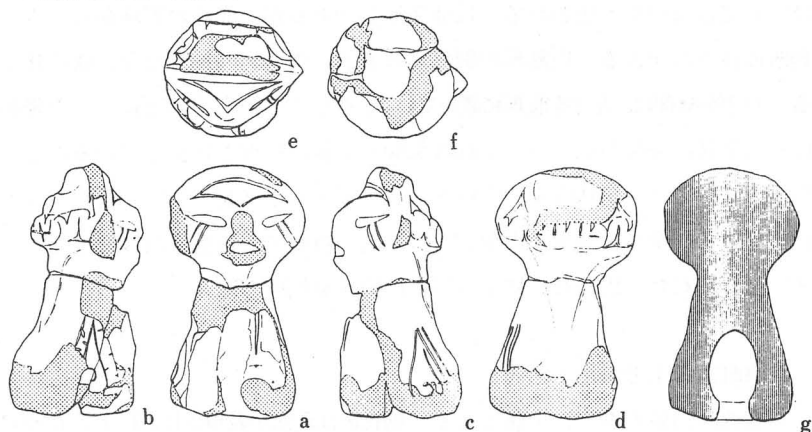
頭部を失った胴部が円錐形をした土偶である。胸部には乳房が表現され、右手を乳房の下にあて、左手を腹部にあてている。いずれの手も四本指である。下腹部には勝坂式土偶の特徴である対称弧



1. 敷島町松島団地



2. 勝沼町宮の上遺跡

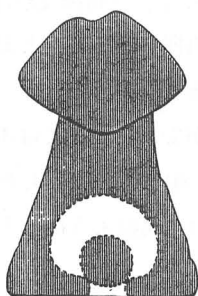


3. 一宮町国分寺遺跡

第1図 櫛原形態土偶 (1/3)

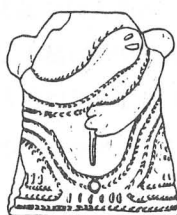


a

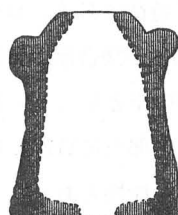


g

4. 東京都八王子市檜原遺跡



a



g

5. 小淵沢町出土



e



f



b



a

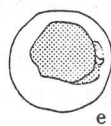


c



d

6. 一宮町釈迦堂塚越北A地区



e



f



b



a



c



d

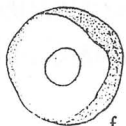
7. 一宮町釈迦堂塚越北A地区



b

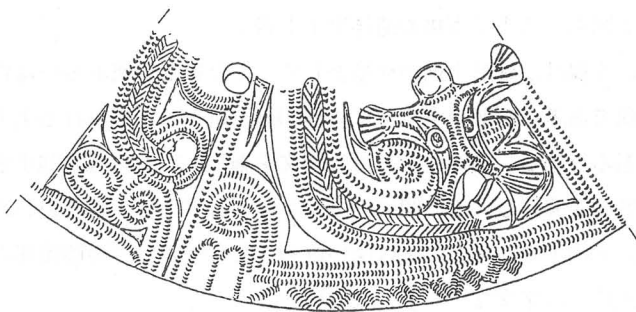


a

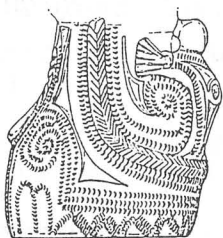


f

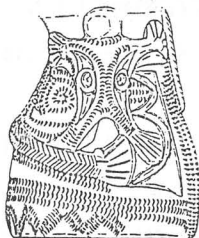
8. 荑崎市坂井南遺跡



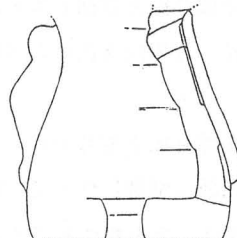
9. 石川県上山田貝塚



c



d



g

第2図 檜原形態土偶 (1/3)

刻文が陰刻されている。左手の下縁と左手の両縁にそって、三角押文が施されている。背中と両脇腹には三角押文と陰刻三叉文を施している。この三角押文と三叉文と対称弧刻文がこの土偶の時代的特徴である。おそらく新道式期に属するものであろう。

頭部との接合部に分割塊製作法の痕跡を認めることができる。ここは木芯で接合しており、木芯痕が中空となっている。土偶は厚手に作られており、中空部の空間もそれ程広いものではないが、底の部分に貫通した穴は、約8mmと小さい。檜原の土偶のように土玉が入って、鳴る土偶であった可能性もある。

第1図3. 一宮町国分寺遺跡出土

檜原の土偶に極めて類似した形態を持つ土偶である。檜原の土偶が両手を省略しているのに対して、この土偶は両手が付けられていた痕跡が窺える。このように欠損部分もあるが、ほぼ全体の形状の判明する土偶である。頭部に半月形の陰刻文を有し、目の下にダブルハの字文を施している。後頭部も一部欠損しているが、双接環の両脇に陰刻三叉文を施し、全体として、玉抱き三叉文をなしていたと思われる。その下に交互刺突による連続コの字文を施している。腹部には正中線が半隆起の中に沈線を施すことによって、表現されている。両脇腹部には玉抱き三叉文が沈線と交互刺突によって表わされている。底部の小さな穴と胴部のやや広い空間によって、中空土偶となっている。この空間もまた、鳴子を入れるためであったかもしれない。

第2図4. 八王子市檜原遺跡出土土偶

この土偶は円錐形土偶の典型として、また鳴る土偶あるいは鈴形土偶また土偶形鈴とも呼ばれる土偶である。胴部の中空部に直径10mmを越えると思われる土玉（石ともいう）が一個入っており、振ると鳴る。額部に半月形陰刻文を施し、目も口も陰刻するという単純な表現である。胸には両乳房が隆起し、その間に正中線が施されている。臍と思われる部分は半隆起状の渦となっている。その下の対称弧刻文は深い陰刻となっている。両脇腹部の三角形の構図の中に交互刺突による連続コの字文などが施されている。

第2図5. 出土地不詳

1969年のサントリー美術館の『土偶と土面』⁽¹⁾では、山梨県小淵沢町出土とあり、他の『古代史発掘3—土偶芸術と信仰』⁽²⁾等では長野県尖石遺跡出土となっている土偶である。この点に関して尖石考古館の守矢昌文氏にお尋ねしたところ、尖石遺跡では出土した記録がないということである。

実物の存在地も出土地も不詳の土偶であるが、まさしく円錐形をした中空土偶であり、頸部の形状より、頭部は別個に作って、組み合せた土偶であると考えられる。

右手を胸部に左手を腹にあてており、腕部の縁には三角押文(?)を施している。指は三本である。左手を載せている腹部は膨み、妊娠状態を示している。腹部の中央に沈線により正中線が施され

ている。膨んだ腹部に下に円孔がある。脇腹部には角押文が充填されている。

第2図6. 一宮町釈迦堂遺跡群塚越北A地区出土土偶

円錐形土偶の頭部を欠くもので、円錐というより方錐というような形状である。両乳房が隆起し、正中線が沈線で表現されている。下腹部の対称弧刻文はやや大きく陰刻している。脇腹部に円文と三角形文が沈線で施されている。底部に貫通孔はないが、胴部は空洞で中に土玉か小石が数個入っていると思われ、振ると、カラカと音を発する。

第2図7. 同 上

これも円錐形土偶の頭部を欠損するものである。また胴部に両腕の剥離痕があるので、先述した土偶のように右手を胸、左手を腹にあてたものであろうか。この土偶も胴部が空洞であるらしく、振るとカラカと音を発したこともあったが、現在は音は発しない。

第2図8. 坂井南遺跡⁽³⁾出土土偶

典型的な円錐形土偶である。目は三角押文が施されている。口は大きく開き、この空洞は円錐の底まで貫通している。この空洞は胴部で広くなるわけでもなく、同じ大きさである。脇腹部に三角押文で玉抱き三叉文を施している。ところが一般に土偶の文様がシンメトリーなのに対して、右脇腹部のみに文様が施されるという特異な文様構成である。なお当博物館の第1回特別展では「笛形土偶」として展示された。

第2図9. 石川県上山田貝塚⁽⁴⁾出土土偶

子を背負う土偶としてあまりに著名な土偶である。左手は前、右手は後にまわしている。手の指は三本指である。子供の脇腹部に玉抱き三叉文が陰刻されている。全体に空白部がないように角押文と三叉文および玉抱き三叉文で充填している。上山田式期の土偶であるが、筆者はこの土偶が中部地方の「新道式土器文化」の影響下に製作されたものではないかと考えている。

この土偶は輪積法で製作されたもので、中は完全な空洞となり、底部の貫通孔は小さい。また頸部の部分に欠損が見られるが、頭部は別個に作られた組み合せ式の土偶であったと思われる。

第3図10. 東京都神谷原遺跡⁽⁵⁾出土土偶

横座のポーズをした土偶である。円錐形土偶とするには、いくつかの疑問もあるが、胴部が中空となり、底に穴があいている。この胴部を中空とする点において、円錐形土偶のカテゴリーに入れておきたいと思う。

3. 勝坂式土偶の多様性

勝坂式土偶は縄文時代の土偶の中でも最も形態的な種類に富んでいる。具体的な事例として、

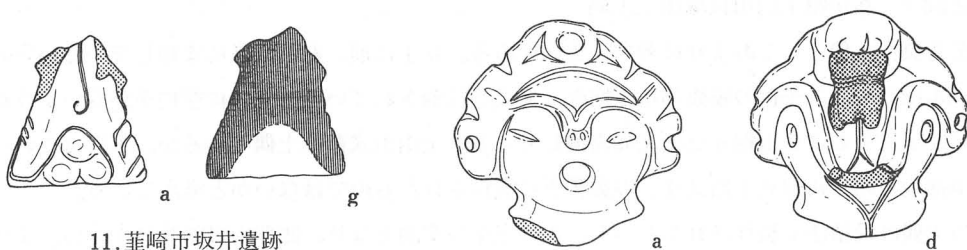
東京都神谷原遺跡の土偶の分析を通じて、有脚立像形土偶の典型である坂井形態土偶、坂井形態の変形で両腕の下った神谷原形態土偶、出産状態を表わした広畑形態土偶、小形粗製の小形土偶、何らかのポーズを示した中形動作形態土偶があることを知った。⁽⁶⁾ この他にも勝坂式土偶には黒駒の土偶のようなものもあるが、類例に乏しいので、言及は避けておきたいと思う。

今回、ここに紹介した所謂円錐形土偶もようやく資料が増加したので、これについても橿原形態土偶として、勝坂式土偶の一形態に加えたいと思う。円錐形土偶については、野口義麿氏の考察がある。氏はこの土偶の形態的特徴から、堀之内式期の筒形土偶の祖形とみなしている。⁽⁷⁾ 確かに坂井南遺跡の土偶は筒形土偶と極めて類似している。しかし中期の後半にこのような土偶がないことから、この両者はまったく関連性のないまま、それぞれの時期に独自に発想・製作されたものと思われる。

奥山和久氏もまた、この円錐形土偶の特徴を7項目にまとめ、その時期と分布を明らかにしている。⁽⁸⁾ 氏のいうように円錐形土偶には中空のものと中実のものがある。筆者のいう橿原形態の土偶は、この中実のものを含まないが、中空の内部に鳴子が存在してもしなくても、中空である

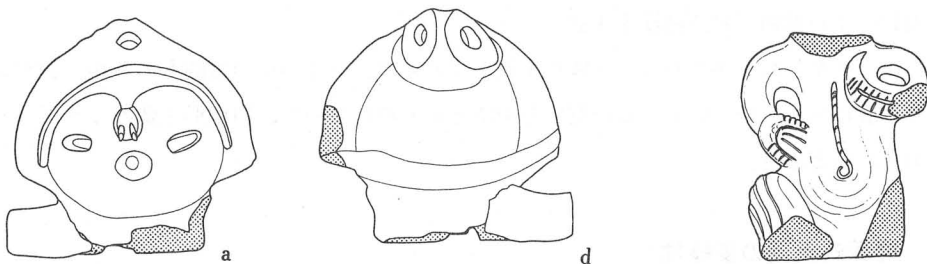


10. 東京都八王子市神谷原遺跡



11. 荏崎市坂井遺跡

12. 塩山市岩堂遺跡



13. 勝沼町釈迦堂三口神平地区

14. 長野県茅野市尖石遺跡

ことが重要であると考えている。また製作法も二通りあるが、これは含めて考えている。

この土偶の特徴はまず第一に胴腹部が中空であることである。中空の内部には土玉や小石が入っており、鈴のように鳴る檜原の土偶や釈迦堂の土偶（第2図6、7）がある。また釈迦堂例のように、中空部が閉塞されているものと、他の図示した土偶のように開口しているものがある。製作法にも二種類ある。松島団地付近出土土偶、伝小淵沢町出土土偶、上山田貝塚出土土偶のような土器と同じ輪積法で製作されるものと、宮の上遺跡出土土偶のように頸部に分割塊製作法の痕跡を留めるものもある。また伝小淵沢町出土土偶や上山田貝塚出土土偶は所謂組み合わせ式土偶で、頭部は別個に作られたのであろう。

時期的には広義の勝坂式期の所産であろう。松島団地付近出土土偶は肩部の隆帯から、おおよそ新道式期に、宮の上遺跡出土土偶は三角押文が明瞭にあることから新道式期に、国分寺遺跡出土土偶、檜原の土偶はおおよそ藤内式期に、伝小淵沢町出土土偶は貉沢式～新道式期、釈迦堂の土偶は藤内式期に、坂井南の土偶は三角押文から新道式期に、上山田貝塚出土土偶も新道式期に、比定され、神谷原の土偶の下限は井戸尻式期である。

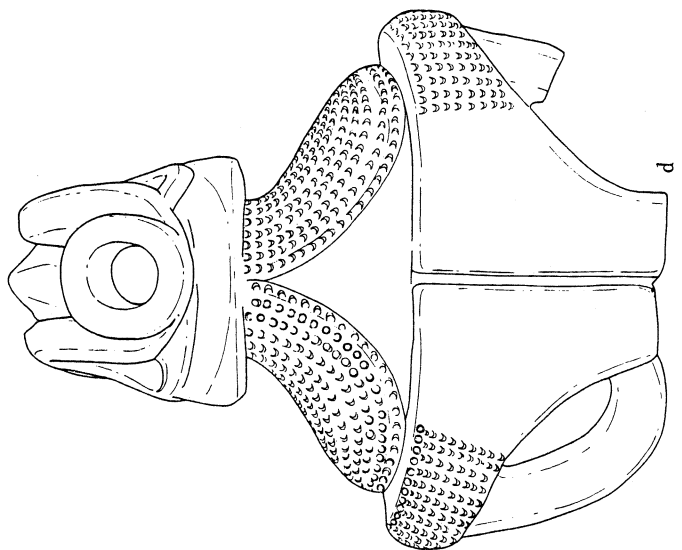
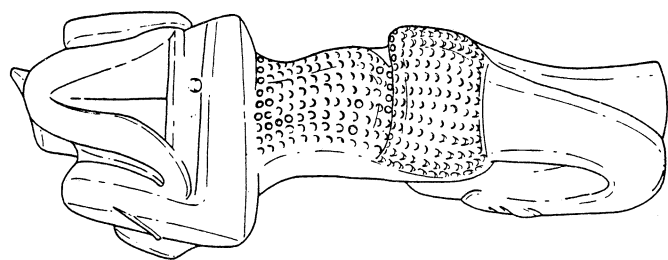
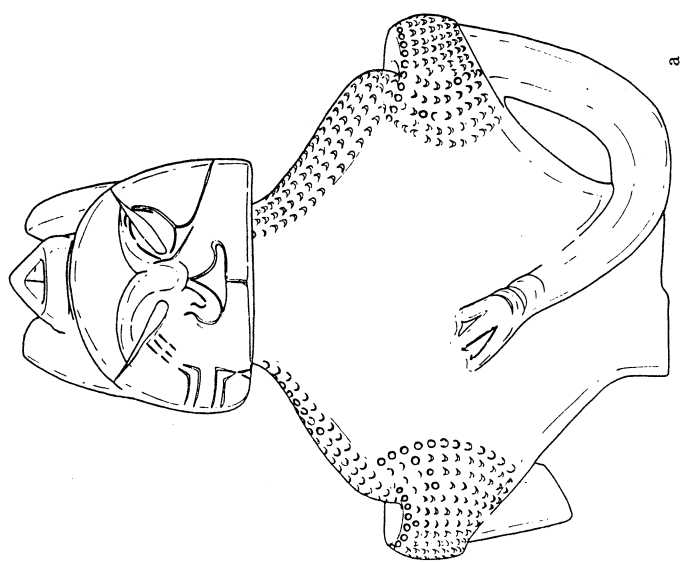
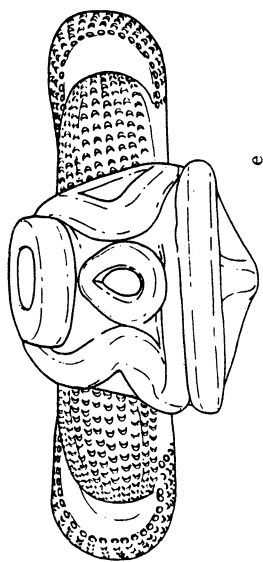
以上のように、すべて広義の勝坂式期に所属し、その中でもより古い部分に集中する傾向にある。

分布に関してみれば、長野県中山遺跡の例を加えれば、山梨県を中心とした中部高地に分布し、勝坂式土器の分布圏と一致する。上山田貝塚出土土偶のみが、逸脱しているが、この上山田式期には中部地方の「新道式土器文化」が北陸地方へ強く影響を与えた時期であり、縄文時代の交流を象徴するような資料である。

檜原形態土偶の一大特色は胴腹部が中空であることである。土偶のほとんどが女性像である中で、この形態の土偶が容器のように中空であることは、ユングを引用するまでもなく、女性像としてより強く認識されるのである。しかもその中空部分に鳴子が入っていれば、まさに自からの胎内で子を育む妊娠した女性像であることは疑う余地のない所である。

妊娠した女性像より一歩進んだ土偶として、出産状態や授乳状態を表わした土偶がある。当博物館の第1回特別展では、これら妊娠・出産・授乳の状態を表わした土偶を人の誕生の道程を語る土偶として一括して「誕生土偶」として展示した。この中で、男性土偶と考えられていた坂井の土偶（第3図11）についても、これは出産状態を表わした土偶として、新しい解釈を試みているのである。⁽⁹⁾そしてこの土偶もわずかではあるが、底面を抉り込んで中空としているのである。これも檜原形態の土偶の系譜を引くものとして理解されるのである。また子供を抱く土偶として著名な東京都宮田遺跡の土偶もわずかに底部の下を抉っているのである。

胴腹部を中空として、中に鳴子を入れて音を発することは、まさに胎内で子を育む女性像としての土偶であることは先に述べた。しかし、同じ時期同じように音を発する土偶がある。古い例では塩山市岩堂崎出土例（第3図12）があり、最近では釈迦堂の三口神平地区から一点出土（第3図13）している。これらの土偶は頭部が中空となり、中に鳴子が入っているものである。頭部から音を発するものと胴腹部から音を発するのでは、まったく意味が異なるのである。鳴る土偶



第4図 黒駒の土偶 (1/3)

として同義的には考えられない。この頭部が鳴る土偶にはまた別な用途が存在したのであろう。

中期後半以降に出現する土鈴については長崎元廣氏の考察があり⁽¹⁰⁾、土鈴の最古のものとして、長野県焼町遺跡4号住居址の遺物が井戸尻Ⅲ式～曾利Ⅰ式に比定されることから、井戸尻式期まで遡るものがあるかもしれないと述べている。こうした過渡的な例があったとしても、土鈴が盛行するのは中期後半である。

中期の前半と後半では社会的にも文化的にも大きな断絶が存在したのではないかと考える研究者も少なくない。土鈴に関してもまったく同様ではなかろうか。鳴る土偶から土鈴へとは系統的な発展は現在のところ認められないのである。両者は別個に発想・製作されたものであり、土鈴は土偶に比べて破毀されることも少ないのである。

右手を胸部、左手で腹部をおさえるポーズは、松島団地付近出土例、宮の上遺跡出土土偶、伝小淵沢町出土土偶に通有に見られるポーズである。また国分寺遺跡土偶や釈迦堂土偶（第2図7）も両腕は剥離しているが、やはり同様なポーズをしていたのではないと思われる。いずれもやや膨んだ腹をおさえているので、妊娠のポーズであろうか。

同じようなポーズをしている土偶が、宮坂英弑氏によって袖珍抱壺押腹座像と呼ばれた壺を抱える土偶（第3図14）である。これは右手で壺を抱え、左手で腹部をおさえるものである。類例は釈迦堂遺跡群にある。これとまったく左右逆なのが九兵衛尾根一号住居址出土土偶である。これらはいずれも腹部が膨み、妊娠状態を示している。そうすると、両腕をひろげて、胸部と腹部をおさえた土偶は妊娠と深い関係のあるポーズではないかと思われる。⁽¹²⁾

ただし、黒駒の土偶のように左手は不明だが、右手を胸部にあてた土偶（第4図）は、腹部は欠損していて、妊娠の兆候はみあたらない。仮面を付けた土偶はことさら性的表現を避けるのであろうか。

4. ま と め

所謂円錐形土偶の中の胴腹部が中空である土偶を橿原形態土偶と呼び、その時期・分布特徴・意味について考えてみた。この橿原形態土偶は広義の勝坂式期の所産であり、上山田貝塚土偶を除いては、勝坂式土器の主要分布圏内に分布する。胴腹部が中空で中に鳴子を入れたものがある点から、この土偶は女性のもつ子供を孕み、生み、育むという能力を直截的に表現した土偶で、一種の妊娠呪具として、まここれから連想される豊穰を祈る呪具として製作されたものであろう。そしてまたこの土偶も毀たれることが定めであったと思われる。わずかに中山遺跡出土例のみが完形である。

なお、勝沼町教育委員会の室伏徹氏と一宮町教育委員会の猪股喜彦氏には、未発表資料の提供と種々御教示をいただいた。記して感謝申しあげる。また、橿原・黒駒・岩堂崎・伝小淵沢町出土土偶など図化されていないものについては、写真と計測値をもとに図化した。図化にあたっては、古屋香代子さんの手をわずらわした。

註

- 1 サントリー美術館 1968 1968 春季号 『土偶と土面』
- 2 江坂輝彌 1972 『古代史発掘 3 —— 土偶芸術と信仰』
- 3 山下孝司 1983 『坂井南遺跡』 韮崎市教育委員会
- 4 小島俊彰 1979 「縄文土器・土製品」 『上山田貝塚』P P.34～60
- 5 沼崎陽 1982 「土製品」 『神谷原』ⅡP P.438～464
- 6 拙稿 1984 「土偶の分割塊製作法資料研究（1）」『丘陵』11 PP.26～34
- 7 野口義麿 1972 『古代史発掘 3 —— 土偶芸術と信仰』
- 8 奥山和久 1984 「中部山岳地帯における縄文中期土偶の基礎的研究」 『中部高地の考古学』Ⅲ PP.168～236
- 9 新津 健 1983 「金生遺跡発見の中空土偶と2号配石」
『研究紀要』1 PP.25～40
- 10 長崎元廣 1976 「縄文の土鈴」 『信濃』28—2 PP.63～73
- 11 桐原 健 1964 「南信・ハケ岳山麓における縄文中期集落の構造」・『古代学研究』38
桐原健氏・宮坂光昭氏がこのような考えを発表している。筆者もまた住居構造・炉形態、
土偶の製作法・遺棄行為等について、この格差について述べたことがある。
- 12 宮坂英式 1953 「ハケ岳西南麓出土土偶の新資料四例」 『信濃』5—8
- 13 山梨県立考古博物館 1983 『土偶』図71. 72. 73. 74